

## 第213回 令和8年4月17日（金）

### 「成功か失敗かを決めるのは誰か」

実験が思い通りいかなかったとき、発明王のエジソンが「これはうまくいかないことがわかったのだから成功だ。」と言っています。様々な発見をした有名な科学者アインシュタインには実証できなかった理論もありました。そのときに彼は自分の学説が間違っているとは一切認めず、反対する学者を徹底的に批判したそうです。

失敗に対する反応はそれぞれですが、それをどう活かすかは自分次第です。スポーツにおいて敗戦を失敗とするならば、大会で優勝の栄冠を勝ち取ることでできなかったチームはどこかで失敗することになります。

負けを認めずコンディションやジャッジのせいにする人もいるかもしれません。予想外のところで負けた場合など、なかなか受け入れるのには苦勞をします。ただし負けたという事実は変わることはありません。

事実と感情を切り離し、負けたことを認める。過去は変えられないのでこれからどうするか、残された手段を考える。もしまだチャンスがあるのなら次はどうすればよいか戦略を立てる。そうすれば失敗は大きな成功への財産になります。

日本人は昔から切腹の文化があり、失敗の責任を誰かに取らせる風潮があります。失敗を糧にして次の成功につなげる、そういった責任の取り方に対して「潔くない」とか「早く辞任すべきだ」といった意見が多々見られます。

同じ失敗を二度も三度もするようならば改善の見込みはないのですが、同じ失敗を最もしない確率が高いのは、その失敗で悔しい思いをして反省をしている人間ではないかと思います。失敗した本人が「こうすれば失敗しなかった」と一番わかっているはずではないでしょうか。

社会ではこのような責任論が主流ですが、学校は違います。やり直しがきくケースがたくさんあります。大事な定期試験だって本番の受験で失敗しないよう力をつけるためだと思えば、失敗を嘆くよりやることはあるはずです。

受験だって長い人生から見ればやり直しがきかないわけではありません。やり直しができるものについて、失敗を価値のあるものにするか、嘆くだけで終わるか決めるのは自分次第なのです。

長い目で見ればあのとき失敗したことが自分の人生にとってかけがえのない経験だった、このように思えることはたくさんあるはずですよ。